

令和 2 年 6 月 26 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02416

研究課題名(和文) 和歌史における後期萬葉長歌の特質とその展開

研究課題名(英文) The characteristics and development of the late "Manyo-shu" choka in the history of Waka

研究代表者

奥村 和美 (okumura, kazumi)

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：80329903

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：『萬葉集』第四期の歌人大伴家持の和歌、中でも長歌を中心に(1)中国詩文からの摂取についての検討、(2)同時代歌人の作品との比較検討を行った。さらに、(3)『萬葉集』長歌の平安朝以降における受容の検討を行った。(1)については、中国の初学書や書儀・書簡などからの摂取を文献に即して明らかにした。(2)については、大伴坂上郎女との越中期の贈答を細かく検討することによって、共通の教養に基づく中国詩文を利用した表現方法を明らかにした。(3)については、藤原定家における長歌からの本歌取りを検討することによって、これまで見過ごされてきた平安期の『萬葉集』に対する歌学的アプローチと実作との関連を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『萬葉集』の長歌の中でも、大伴家持の長歌について、中国の經書のような一流の典籍からだけでなく、『孝経』のような初等教科書、また『杜家立成雑書要略』のような書簡実用文例集などからも積極的に語彙や表現方法を摂取していることを明らかにした点で、上代知識人の学問や教養の広がりを具体的に指摘した意義は大きい。

また、『萬葉集』の長歌が平安朝においても読みつがれ、漢字本文も含めて、歌人達が新しい表現の源泉として学んでいたことを明らかにした点において、和歌史解明に寄与する意義を有する。

研究成果の概要(英文)：The poems of the poet Otomo Yakamochi of the fourth stage of "Manyo-shu", especially the long poems, were examined about the intake from Chinese poems, and compared with the works by poets of the same period. In addition, we examined the acceptance of "Manyo-shu" choka after the Heian dynasty. Regarding I, we clarified the intake from Chinese elementary school books, writings, and letters based on the literature. Regarding II, by clarifying the gifts in the middle of the Etchu period with Otomo Sakanoue Irtsume, we clarified the expression method using Chinese poetry based on common culture. Regarding III, by examining Fujiwara Sadaie's song collection from long poems, we clarified the relationship between the Poetic approach to "Manyo-shu" in the Heian period and the actual work.

研究分野：上代国文学

キーワード：萬葉集 和歌 長歌 比較文学 初学書

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

萬葉和歌史の最後尾に位置して、大伴家持の長歌は、平板、冗長、散漫、陳腐というような否定的評価を受けることが多く、柿本人麻呂・山部赤人・山上憶良らの長歌の模倣に終始しているというのが共通した見解である。

しかしながら、家持が、長歌において新しい試みを積極的に行っていることも事実である。注目すべき試みとしては、すでに科研費基盤(C)2011年度～2013年度、課題番号23520222「後期萬葉長歌の和歌史的研究」(研究代表:奥村和美)や、科研費基盤(C)2014年度～2016年度、課題番号26370236「後期萬葉長歌における教養基盤と表現形成の研究」(研究代表:奥村和美)によって明らかにしてきたように、中国詩文からの受容があげられる。例えば、橘という新しい素材を詠む際に、聖武天皇の短歌を利用するだけでなく、中国における橘の詠物的な賦や詩の方法を巧みに取り入れ、そのことによって橘氏を譬喩する寓意表現を可能としている。中国詩文から語彙を摂取するだけでなく、詠物の表現方法をも咀嚼し、応用しているのである。そのような中国詩文の受容において、表現の源泉となったものの中に、初等の識字教科書である『千字文』や初唐伝奇小説『遊仙窟』がある。特に『遊仙窟』は、越中における大伴池主との濃密な文学交流の上で欠くことのできない媒体であった。これら実用書・通俗書の影響の実態を、通時的共時的視点に立って綿密に跡付け、『萬葉集』全体の中で正確に位置づけることが求められる。

近年、家持長歌を主たる対象として論じる研究が増えてはきているが、作歌動機の解明が中心で、先行の長歌も視野に入れた和歌史的観点から、或いは、家持ら奈良朝知識人の教養、特に中国文学によって形成された教養基盤という共時的観点から、長歌の変容という現象をどのように論理化するか、ということについては研究が進展していないように思われる。さらに、平安朝以降の長歌受容ということになると、『萬葉集』の伝本研究の立場からの立論がある程度で、詠作及び歌学の面ではほとんど手を付けられていない状況にある。

## 2. 研究の目的

本研究は、『萬葉集』の第三・四期いわゆる後期萬葉の長歌、特に大伴家持の長歌表現を主たる対象とする。大伴家持の作品研究は、いままお短歌中心の傾向があるが、あえて長歌を中心に据え、その表現の基盤をなした教養、すなわち柿本人麻呂作歌をはじめとする先行歌の表現、加えて中国詩文の語彙や表現方法等を受容していった過程を分析する。そのことを通して、奈良朝の知識人がもっていた教養を和漢にわたって広く明らかにするとともに、それが一歌人の中でどのように和歌表現へと形成されていったのか、その道筋を解明する。

## 3. 研究の方法

研究方法は、大きく次の3つのアプローチからなる。

### (1)【中国詩文からの摂取についての検討】

中国詩文の中でもいわゆる四書五経や正史或いは詞華集『文選』のような第一級の典籍だけではなく、初学書や書儀などの実用的な文献、或いは通俗の小説にも目を向ける。これらの中にはすでに中国本土で亡失したものも多数含まれるが、敦煌文書や逸文等丹念に資料を収集し、日本側では正倉院文書や出土木簡にも目を配ることによって、奈良朝知識人の教養基盤を幅広く捉える。そこから、そのような教養が家持においてどう和歌表現に反映・利用されているのか、実用書・通俗書の利用の実態とそれが表現世界の形成に関与することになる道筋をたどる。

### (2)【大伴池主の長歌作品との比較対照】

家持の越中守時代の長歌を検討する上で、歌友であった大伴池主の長歌作品との比較対照をおこなう。特に越中における長歌の集中的贈答において、家持が池主の長歌に刺激をうけ長歌形式に対する認識を深めていったことは、すでに指摘されるところである。(1)【中国詩文からの摂取についての検討】とも関連して、家持池主の共通の教養であった中国詩文、たとえば初唐伝奇小説の『遊仙窟』などの俗書をも含んだ中国詩文についての広範な知識を正確に把握することがまず必須である。その上で、具体的に歌句に即しつつ、贈答の実際において、池主から家持へ、家持から池主へという歌人間の相互影響を動的に捉える。

### (3)【平安朝以降における長歌受容の検討】

平安時代、『後撰集』撰進に際して『萬葉集』の訓読(古点)が試みられたとき、訓読の中心となったのは短歌であり、長歌への関心は決して高くなかった。古次点期において萬葉長歌がどのように読まれていたのか、なお解明されていない部分が多い。このことを、たとえば次点加點者の詠作における萬葉長歌の摂取のしかたの検討を通して考察する。或いは歌学書歌論書における萬葉長歌の引用のしかたの検討を通して考察する。それらの検討を通して、平安朝の歌人の視点から萬葉長歌を捉え直し、長歌形式の変容と衰退を考察する。

## 4. 研究成果

### (1)平成29年度(2017)の成果

3-(1)【中国詩文からの摂取についての検討】の観点から、家持長歌における初学書・実用書からの摂取と経書からの摂取とについて考察した。前者については、中国の書簡実用文例集である『杜家立成 雑書要略』 正倉院に伝わる という書儀を軸に、敦煌書儀なども視野に入れ、書儀書簡から摂取された表現についていくつかの新しい指摘をおこなった(論文 奥村和美「大伴家持の和歌と書儀・書簡」、奈良女子大学古代学学術研究センター『第13回若手研究者支援プログラム「漢字文化の受容」報告集』、依頼論文につき査読無、2018年3月16日、1-13頁)。後者については、従来、気分的で散漫な表現とされていた家持長歌(19・4089)に翻訳語が用いられていることを指摘し、それだけでなく構成においても『毛詩』大序をはじめとする中国の文学論が踏まえられていることを指摘した(図書 奥村和美、勉誠出版、『古典文学の常識を疑う』、共著(本書のうち「上代文学はどのような古代日本語で表されているのか」を分担執筆)、22-25頁、松田浩・上原作和・佐谷眞木人・佐伯孝弘編集、2017年5月31日)。なお、先取りするかたちになるが、3-(3)【平安朝以降における長歌受容の検討】に関わって、建保期に順徳天皇の命によって催された「内裏名所百首」を対象として、持統天皇歌(1・28)の本歌取りのしかたを中心に考察した(論文 奥村和美「天の香具山の本意 内裏名所百首を中心に」、井手至博士追悼号『萬葉語文研究』、依頼論文につき査読無、特別集、2018年5月30日、263-286頁)。これを通して、後代の萬葉和歌の受容実態について、具体的な見通しを得ることができた。

### (2)平成30年度(2018)の成果

引き続き3-(1)【中国詩文からの摂取についての検討】の観点から、越中の家持から都の大伴坂上郎女にあてた歌の、待遇表現の中に、中国の書儀・書簡に基づく表現の見えることを指摘し、同じく中国の書儀・書簡の影響が見られる大伴池主との贈答との差について考察した(図書 奥村和美、笠間書院、『高岡市万葉歴史館論集 19』、共著(本書のうち「越の国の歌だより 書儀・書簡と家持の和歌」を分担執筆)、2020年刊行予定)。また、この過程で、『日本霊異記』の僧侶間の改まった会話文の中に、中国の書儀・書簡を利用した表現のあることを見出し、研究会にて報告、翌年論文化した(論文 奥村和美「『霊異記』における書儀・書簡的表現の利用」、奈良女子大学文学部日本アジア言語文化学会『叙説』、査読有、47号、2020年3月7日、11-22頁)。これは、今後、日本での書儀・書簡的表現の受容実態を考える上で見過ごすことのできない例である。また、引き続き3-(3)【平安朝以降における長歌受容の検討】も行った。平安時代における『萬葉集』長歌の受容の実態については、不明な点が多かったが、藤原定家における長歌からの本歌取りのしかたを検討し、『萬葉集』の漢字本文をも視野に入れた歌学的興味による長歌読解のあることを明かにした(図書 奥村和美、塙書房、『萬葉集研究 第三十八集』、共著(本書のうち「『萬葉集』長歌の受容 藤原定家の場合」を分担執筆)、241-280頁、芳賀紀雄監修・鉄野昌弘・奥村和美編集、2018年12月25日)。

### (3)31年度・令和元年度(2019)の成果

引き続き3-(1)【中国詩文からの摂取についての検討】を初学書『孝経』を中心に持って行った。『続日本紀』天平八年十一月条に載る「橘宿禰賜姓を願う表」が広範に『古文孝経』及びその注を踏まえることを確認し、後年、その表を想起して詠まれた家持長歌にも同様に『古文孝経』を意識的に踏まえる表現のあることを指摘し、そこに家持の橘諸兄に対する強い憧憬のうかがえることを明らかにした(論文 奥村和美「橘宿禰賜姓を願う表と大伴家持」『美夫君志』、依頼論文につき査読無、100号、2020年3月20日、16-34頁)。またここでとりあげた家持長歌に対する大伴坂上郎女の返歌に目を向け、家持長歌との対応を綿密に考察し、坂上郎女の理解と応え方を通して改めて家持の中国詩文を利用した表現方法を考察した。これにより、3-(2)【大伴池主との長歌作品との比較対照】を行う上で重要な基礎的考察を行うことができた(発表 奥村和美「大伴坂上郎女の来贈歌 大伴家持代作歌への返歌として」、萬葉学会全国大会、2019年10月20日、於淑徳大学)。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 8件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 奥村和美	4. 巻 47
2. 論文標題 『靈異記』における書儀・書簡的表現の利用	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 奈良女子大学文学部日本アジア言語文化学会『叙説』	6. 最初と最後の頁 11-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 奥村和美	4. 巻 100
2. 論文標題 橘宿禰賜姓を願う表と大伴家持	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 美夫君志	6. 最初と最後の頁 16-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 奥村和美	4. 巻 38
2. 論文標題 『萬葉集』長歌の受容 藤原定家の場合	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 萬葉集研究	6. 最初と最後の頁 241-280
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 奥村和美	4. 巻 5号
2. 論文標題 藤原定家の『万葉集』撰取 内裏名所百首を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本文学研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 38-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 奥村和美	4. 巻 特別集
2. 論文標題 天の香具山の本意 内裏名所百首を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 井手至博士追悼号『萬葉語文研究』	6. 最初と最後の頁 263-286
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 奥村和美	4. 巻 別冊
2. 論文標題 漢文から何を学ぶか - 中学国語科における漢語と漢字のルーツの学習 -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教育システム研究	6. 最初と最後の頁 23 - 28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 奥村和美	4. 巻 0
2. 論文標題 上代文学はどのような古代日本語で表されているのか	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 古典文学の常識を疑う	6. 最初と最後の頁 22 - 25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 奥村和美	4. 巻 0
2. 論文標題 大伴家持の和歌と書儀・書簡	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 第13回若手研究者支援プログラム「漢字文化の受容」報告集	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 奥村和美
2. 発表標題 越の国の歌だより 書儀・書簡と家持の和歌
3. 学会等名 2018高岡万葉セミナー「大伴家持歌をよむ」(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 奥村和美
2. 発表標題 『日本霊異記』における書儀・書簡的表現の利用
3. 学会等名 奈良女子大学大和・紀伊半島学研究所一般共同研究研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 奥村和美
2. 発表標題 大伴坂上郎女の来贈歌 大伴家持代作歌への返歌として
3. 学会等名 萬葉学会全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 奥村和美
2. 発表標題 橘宿禰賜姓を願う表と大伴家持
3. 学会等名 美夫君志会全国大会招待研究発表会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 奥村和美
2. 発表標題 大伴家持の和歌と書儀・書簡
3. 学会等名 奈良女子大学古代学学術研究センター主催若手研究者支援プログラム
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 奥村和美	4. 発行年 2020年
2. 出版社 笠間書院	5. 総ページ数 150
3. 書名 『高岡市万葉歴史館論集 19』、共著(本書のうち「越の国の歌だより 書儀・書簡と家持の和歌」を分担執筆)	

1. 著者名 奥村和美	4. 発行年 2020年
2. 出版社 かもがわ出版	5. 総ページ数 179
3. 書名 奈良女子大学文学部 まほろば 叢書『気候危機と人文学 人々の未来のために』、共著(本書のうち「萬葉後期の自然観照 情調の表現をめぐって」を分担執筆)、68 - 87頁	

1. 著者名 奥村和美	4. 発行年 2017年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 227
3. 書名 『古典文学の常識を疑う』、共著(本書のうち「上代文学はどのような古代日本語で表されているのか」を分担執筆)、22 - 25頁、松田浩・上原作和・佐谷眞木人・佐伯孝弘編集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----